



# わたしの聖戦

女性が働くことについて

112

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

## 歴史にみる「祈り」

学生の頃は、歴史に興味がわかなかった。たゞえ史実の不明なエピソードで作られたとしても、小説や映画で見る歴史はダイナミックで魅力的なのに、なぜ学校で学ぶそれはあんなにもつまらないのだろうか。

ある歴史学者がいうには、学説が諸説あつてどれを採用したらよいかわからないので、おのずと年号と出来事をセットにして暗記する教育に落ち着いてしまうのだという。もつともらしいが納得のいかない話である。

医学や健康ばかり扱ってきた私が急遽（きょ）歴史に親しむようになったきっかけになり、歴史の面白さを少しばかり理解することができた。次第に戦国武将のみならず、はるか昔の人類誕生の時代や明治時代などにも関心を抱くようになった。

随分昔から発達してきた。たとえば、縄文時代の土偶には妊婦が描かれたものが多くあるが、土偶を故意に壊し散布した行為は、生命の再生と収穫物の豊饒を祈願する地母神信仰に基づいたものであることを示し、安産を願



て祀り、酒やご馳走で鬼神たちをもてなすことによつてこれらの侵入や横暴を防ごうとした。

科学や情報が絶対的に乏しかった時代は、人の力だけではどうしようもないことがあるという事実を素直に悟り、日々の生活の不安を少しでも和らげたいとの期待を寄せずにはいられなかったのだろう。その精神性は現代も受け継がれ、私たちの暮らしに深く関わっている。

「ようしようしゃくほう」として、いまも一部の神社で神事として続いているという。

当時、人々が祈ったのはどんなことなのだろう。書物の記載から察するに、たとえば種まき・収穫、争いごとなど集団の行動に関する事、旅の安全、健康、そして恋占い。幅広い出来事の行方について神意を問ひ、吉凶を占っていたようである。時代が変わっても人間のおこないにさほどの差がないのが面白い。

アメリカの国立衛生研究所は、多額の予算を予防医学に投入しているが、最近の人気テーマに「祈り」があるという。歴史に親しむと、いかに私たちが何もわかっていないか、ということがよくわかる。歴史は人の驕りさえも包み込む。

イラスト・伊藤栄章